

北海道で見られる淡水ガメ 飼育下から野外まで

野田英樹

409-0193 山梨県上野原市八ッ沢2525 帝京科学大学生命環境学部アニマルサイエンス学科

The fresh water turtles that can be observed in captivity and wild of Hokkaido

By Hideki Noda

Department of Animal Sciences, Faculty of Life & Environmental Sciences, Teikyo University of Science, 2525, Yatsusawa, Uenohara, Yamanashi, 409-0193, Japan

はじめに

北海道はブラキストン線以北に位置しており、現生の淡水性カメ類は自然分布していない。北海道の先住民族であるアイヌの言葉に「カメ」は存在している(ecinke エチンケ(頭が陰茎のようなもの), hecinke ヘチンケ, atuy-kor-kamuy アトウイコロカムイ(海を所有する神), atuy-kor-ekasi アトウイコロエカシ(海を所有する翁))が、それらはウミガメ類を指すものと考えられ、明治期のアイヌ民族の暮らしを深く描いたコミック「ゴールデンカムイ12巻第114話(野田, 2017)」の中でも、ウミガメを捕獲する場面が登場している。ウミガメ類は現代でも漂着しており、たとえば浜頓別クッチャロ湖水鳥観察館(浜頓別町)には、昭和50年に漂着したオサガメ *Dermochelys coriacea* の剥製が収蔵され展示されている。また、雨乞いの儀式にアカウミガメ *Caretta caretta* の頭骨を用いる風習もあったらしく(佐賀, 2019)、アイヌ民芸品にもカメをモチーフとした物が多く、阿寒アイヌコタン(釧路市)にはカメの名を指す「イチンゲの店」という名の民芸品店も存在している。

北海道の野外で見られる淡水ガメ

明治以降、政府による北海道開拓は進み、同時に本土の文化とともに多くの動植物が北海道に持ち込まれた。これらは国内外来種となり現在も多くの種が分布している。カブトムシはペットとして持ち込まれたものが野外に逸出し、クワガタ類などの在来種と競合していると心配されており(細谷・

荒谷, 2007)、ヒキガエルは多くの地方で分布を拡大し、在来生態系に悪影響を引き起こすおそれがあるため、北海道の指定外来種に指定されている(北海道環境生活部自然環境局自然環境課, 2015)。淡水性カメ類についても例外ではなく、クサガメ *Mauremys reevesii* とミシシippアカミミガメ *Trachemys scripta elegans* (以下アカミミガメ) が野外で発見され、捕獲される例が後を絶たない。アカミミガメについては酪農学園大学による調査が行われているが(更科他, 2007)、本格的な駆除等は進んでいない。そもそもアカミミガメは北海道の気候では冬の寒さに耐えることが難しく、特に孵化に必要な温度の確保と、幼体の越冬が難しいのではないかと考えられ、徳田(2011)も、繁殖の有無については精査が必要と述べている。Browne and Hecnar (2007)は、カナダの気候ではアカミミガメは寒さのため分布拡大することができず、外来種ではあるが脅威ではないと述べている。また実際に北海道の水域で活動する調査会社の方に話を伺っても、目撃・捕獲されるアカミミガメは大型なものが多く、子ガメは見たことがないとのことであった。これらのことから、北海道で目撃されるアカミミガメ等は飼育個体の逸出が主であり、繁殖定着には至っていないのではないかと予想される。もっとも、温泉地などではナイルティラピアやグッピーが野生化していることから、そのような地域に遺棄されれば、繁殖し定着する可能性も否定できないため注意が必要である。

北海道では前述のとおり爆発的なアカミミガメの

増殖は見られていない。一方で、北海道民にとって淡水ガメは当然珍しいものであることから、水路等で捕獲されたアカミミガメが博物館相当施設等に持ち込まれ、飼育展示されている事例が多いようだ。筆者は2020年4月から2022年3月まで北海道に赴任し、各地を回る中で、展示されているカメ類の種類や状況を記録したため、以下に取りまとめ、報告する。ただし、筆者の行動範囲は札幌近郊に偏っており、しかも新型コロナウイルスの影響で外出が制限されている期間が長かったことから、特に道東、道南へ行く機会が少なかったため、未確認施設が多数残されていることに留意されたい。

北海道の生体展示施設で見られる淡水ガメ

①稚内市立ノシャップ寒流水族館(稚内市)

ノシャップ岬にある日本最北の水族館である。ペンギン類や海獣類から、世界の熱帯魚などまで様々な生物を展示している。水族館出口近くの展示場でクサガメ、アカミミガメが展示されている。日本最北端である宗谷岬周辺にカメ類展示施設はないことから、地理的に日本最北で見られるカメである。

②北の大地の水族館(北見市)

アマゾン川の大型熱帯魚の水槽の隣の専用水槽でトゲモモヘビクビガメ *Acanthochelys pallidipectoris* を展示している。グッピーが同居しているが、エサではなく残餌処理のために入れているとのことで、カメには配合飼料を給餌している。アジアの熱帯魚水槽では、アジアアロワナやオオウナギなどと共にスッポンモドキ *Carettochelys insculpta* が展示されており、優雅に泳ぐ姿や、オオウナギに抱きつこうとする様子を観察することができる。出口近くでは、特定外来生物であるウチダザリガニと並べられる形でアカミミガメを展示し、外来種問題について啓発を行っている。

③宮島沼水鳥・湿地センター(美唄市)

マガンの渡りで有名であり、ラムサール条約登録湿地の宮島沼は、国指定鳥獣保護区に指定されている。同センターでは主に渡り鳥に関する資料の展示をしているが、宮島沼周辺で観察される魚類や両生類の展示も行っており、付近で捕獲されたクサガメとアカミミガメをFRP製の大型ダイライト水槽で展示している。冬季は冷え込むため屋内通路に置かれているが、春から秋まではエントランスの軒下に置かれ、来館者の目を楽しませている。

④東大雪自然館(上士幌町)

上士幌町ひがし大雪博物資料館と環境省ぬかびら温泉郷ビジターセンターからなる連携施設であり、博物資料館では上士幌町で確認される生物の生体、標本の展示が充実している。生体展示コーナーにクサガメが展示されており、学芸員によると、おそらくペットが迷子になったものが持ち込まれたのではないかとのことであった。なお、当館は外国産昆虫の標本展示も充実しており、日本に3頭しかないブーゲンビルトリバネアゲハ(ビクトリアトリバネアゲハとプリアムストリバネアゲハの種間雑種)を収蔵している。

⑤旭川市旭山動物園

日本最北の動物園として有名な動物園であり、「両生類・は虫類舎」では数多くの両生類、爬虫類を展示しているが、ここで見られるカメ類はニホンイシガメ *M. japonica* のみである。オランウータン舎のプールにはボルネオカワガメ *Orlitia borneensis* が泳いでおり、同じボルネオ島に生息する類人猿とカメ類を同居させる混合展示を行っている。昨今の展示手法として様々な動物種とカメ類を同居させる例は多いが、ボルネオカワガメとオランウータンの同居例はおそらく唯一である。なお、カワガメの泳ぐプールはガラス面から観察できるが、オラ

ンウータンは特定動物であるため、ガラス水槽の外側に頑丈な鉄格子を設置し、ガラスが割れた場合でも動物が逸出しないよう対策されている。

⑥おびひろ動物園(帯広市)

ビーバー・ヘビ・カメ舎で、アメリカビーバーやイズナ、アオダイショウと共にクサガメを飼育展示している。冬季はアオダイショウとクサガメを越冬させているため、展示を休止している。

⑦札幌市円山動物園

園内の「は虫類・両生類館」は、国内屈指の両生爬虫類展示施設であり、国内外の小型種から大型種まで幅広く展示している。例えば、ここではハミルトンガメ *Geoclemys hamiltonii*、コウヒロナガクビガメ *Macrochelodina expansa* が泳ぐ姿を見ることができる。コウヒロナガクビガメを国内で展示しているのは当園だけであり、しかも雌雄で飼育され、産卵に至っているため、今後の繁殖成功に期待がかかっている。その他、「オープンラボ」と呼ばれるバックヤードは来園者が覗き見ることができ、モエギハコガメ *Cuora galbinifrons* やスペングラーマガメ *Geoemyda spengleri* の繁殖の様子を見ることができる。淡水ガメではないが、アルダブラゾウガメ *Aldabrachelys gigantea* とハウシャガメ *Astrochelys radiata* の展示もおこなっている。

⑧サンピアザ水族館(札幌市)

JRおよび札幌市営地下鉄東札幌駅に直結した商業施設の一角にある水族館である。昔ながらの自動車窓水槽が並び、「めずらしいサカナ」コーナーにスッポンモドキを展示している。

⑨札幌市豊平川さけ科学館

札幌市内を流れる豊平川に隣接するサケ類の飼育展示施設である。イトウをはじめ、各種のサケ科魚類を見ることができる。博物館相当施設として、

市内で捕獲されたクサガメとアカミミガメを展示し外来種問題を啓発する役割を担っている。

⑩ノースサファリサッポロ(札幌市)

札幌市南区にある民間の動物展示施設であり、大型動物やフクロウ類とのふれ合いを売りにしている。ホームページではニホンイシガメとマタマタ *Chelus fimbriatus* を飼育していることになっているが、2020年9月に訪問した際にはそれらは見られなかった。淡水ガメではないがパンケーキガメ *Malacochersus tornieri* とケヅメリクガメ *Geochelone sulcata* が展示されており、ケヅメリクガメには餌やり体験やふれあいを実施していた。

⑪アニマルカフェジャンゴー狸小路店(札幌市)

札幌市市街地の繁華街にあるアニマルカフェで、札幌市内にある爬虫類専門店の系列店である。店内には多くの鳥類が放し飼いになっているエリアで、餌やりや写真撮影ができる。爬虫類コーナーを含め、ほとんどの個体が展示のみならず販売されているため、個体や種の入替わりは激しいものと予想される。2020年9月に訪問した際には淡水ガメはおらず、リクガメであるアルダブラゾウガメとギリシャリクガメ *Testudo graeca* が展示されていた。

⑫サケのふるさと千歳水族館(千歳市)

千歳川をサケが遡上する様子を館内から見ることができる水族館である。源流である支笏湖から下流までの水生生物を展示している。サケ漁に関する資料の展示も充実している。北海道の両生類と甲殻類コーナーにスッポン *Pelodiscus sinensis* が展示されているほか、中流域の水槽にクサガメ、世界の淡水魚ゾーンにスッポンモドキが展示されている。また、2020年には特設コーナーにタレントの中川翔子氏所有のカブトニオイガメ *Sternotherus carinatus* とアカミミガメが展示されていた。

⑬登別マリンパークニクス(登別市)

民間の水族館で、ペンギン類や海獣、イルカ類などの展示が充実している。施設内には「陸族館」という爬虫両生類館があり、マタマタ、ミナミインドハコスッポン *Lissemys punctata punctata*, キイロドロガメ *Kinosternon flavescens*, ジーベンロックナガクビガメ(チリメンナガクビガメ) *Macrochelodina rugosa*, ワニガメ *Macrochelys temminckii*, カミツキガメ *Chelydra serpentina* が展示されている。いずれの水槽も広く、のびのびと暮らすカメたちの様子を観察することができる。リクガメも展示されており、ケヅメリクガメ、パンケーキガメ、アカアシガメ *Chelonoidis carbonarius*, インドホシガメ *Geochelone elegans* が展示されている。

⑭おたる水族館(小樽市)

海岸沿いの立地を利用し、海水の流入する海獣展示が目玉の水族館だが、淡水ガメは展示していない。アカウミガメとアオウミガメ *Chelonia mydas* は展示しており、漁網に絡まり、肢を失ったウミガメも展示している。

⑮函館市熱帯植物園(函館市)

函館湯の川温泉にある植物園で冬になるとニホンザルが温泉に入る姿を見ることができる。植物園の熱帯温室には池があり、アカミミガメが展示されている。中にはメラニズムオスもみられ、比較的大型個体が飼育されている。ホームページにはクサガメも展示しているという情報があったが、2021年11月に訪問した際には、アカミミガメのみであった。

おわりに

淡水ガメが分布していない北海道では、住民にとってカメは身近な存在ではない。それでもアカミミガメのような外来種でも本州ほど嫌われることな

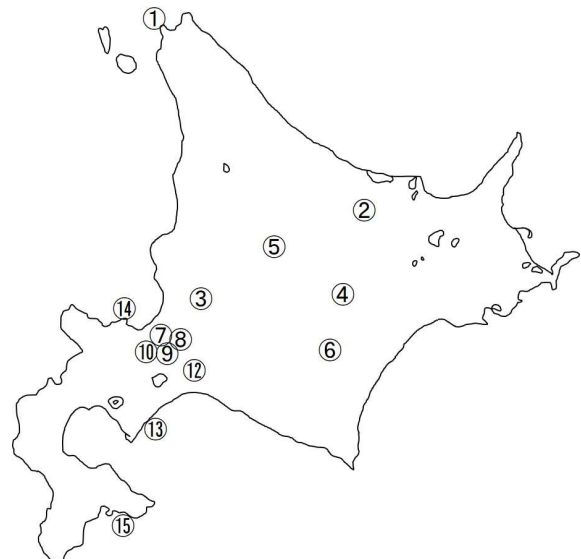


図1. 北海道のカメ類展示施設. 図中の番号は、本文中で各施設を示した番号と一致する。ただし、⑩は⑦と隣接しているため省略。

く取り扱われているのは興味深い。公開施設ではないので今回は取り上げていないものの、ペットのアカミミガメ(近所の川で数十年前に拾ったらしい)が店内で歩いている姿を見られる飲食店も存在している。野外で普通に見られない地域でも、やはりカメは人々に愛される存在なのかもしれない。

引用文献

- Browne, C. L. and S. J. Hecnar. 2007. Species loss and shifting population structure of freshwater turtles despite habitat protection. *Biological Conservation* 138: 421-429.
- 北海道環境生活部自然環境局自然環境課. 2015. 指定外来種の指定(オンライン). <https://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/skn/shiteigairaishu01.html> (2021.9.7確認)
- 細谷忠嗣・荒谷邦雄. 2007. クワガタムシ・カブトムシ類の外来種問題. *遺伝* 64(3):54-58.
- 野田サトル. 2017. エチンケ. *ゴールデンカムイ* 12(114):63-80.
- 佐賀彩美. 2019. もっと知りたいアイヌの心9 雨・月・太陽. *広報誌「開発こうほう」* 677:28.

更科美穂・林芽衣・菅原愛理・前田有里・佐藤信洋・岡本康寿・吉田剛司. 2007. 札幌都市部の中島公園における外来淡水カメ類の捕獲事例. 酪農学園大学紀要 自然科学編 42(1):37-42.

徳田龍弘. 2011. ミシシippアカミミガメ. p.51. 北海道爬虫類・両生類ハンディ図鑑 北海道新聞社, 北海道.

足立区におけるアライグマによると思われるクサガメの食害の初記録

辻井聖武

190-0022 東京都立川市錦町2-1-22 株式会社 自然教育研究センター

First record of Reeves' pond turtle probably fed by common raccoon in Adachi, Tokyo

By Masamu Tsujii

Center for Environmental Studies, 2-1-22, Nishiki-cho, Tachikawa, Tokyo 190-0022, Japan

近年, アライグマ *Procyon lotor* によると思われるニホンイシガメ *Mauremys japonica* (以下イシガメ) の食害が全国で相次いで報告されている(小賀野他, 2014, 2015; 鈴木他, 2015; 田上他, 2019; 多田他, 2017). 食害はイシガメに留まらず, クサガメ *M. reevesii* やミシシippアカミミガメ *Trachemys scripta elegans* にまで及んでいる(小賀野, 2019; 小菅・小林, 2015; 楠田他, 2020). 東京都足立区では, これまでに食害を受けた淡水棲カメ類の情報はなかったが, クサガメにおいて初めてアライグマによる食害と思われる個体が発見されたのでここに報告する.

2020年4月15日11時頃, 足立区に位置する河川での調査中に陸上の枯死したヨシ *Phragmites australis* の茂みの中に隠れている状態でクサガメを発見, 保護した(図1). 発見されたクサガメはメス成体の6齢以上の個体で, 発見時は左前肢以外の四肢と尾の欠損が認められた(図2). 右前肢, 左後肢, 尾部は既に完治していた状態であったが, 右後肢は治癒しかかっている状態であった. 四肢や尾以外の外傷はなかった. 発見当時は持ち合わせの測定機材がなかったため甲長等の測定は行わなかった. その後の測定で甲長は12.8cmであった. また, 足立区ではアライグマやホンドタヌ

キ *Nyctereutes procyonoides viverrinus* が生息しているとされる(浅羽純一, 私信).

これまでアライグマによると思われる淡水棲カメ類の食害の特徴を調査経験や文献などに基づいて整理すると, 1) 後肢あるいは前肢, またはその両方や尾, 頭部が噛みちぎられている, 2) 個体によっては内臓まで捕食されている, 3) 甲の外傷はほとんどないことが挙げられる. 淡水棲カメ類の四肢欠損には, 草刈機などの機械による損傷があるが, 草刈機では四肢の他に甲にも外傷を与えることが多いと考えられる. また, クサガメの捕食者としてホンドタヌキが挙げられる. 足立区にもホンドタヌキは生息しているとされるが, 今回のクサガメの欠損は, カメの甲に外傷が無く, 選択的に四肢や尾が欠損している点でアライグマによると思われる先行事例(小菅, 2011; 小菅・小林, 2015)に酷似している. 甲の外傷がほとんどないということは, ホンドタヌキよりもアライグマの方が手先が器用で四肢や頭部を引っ張り出せるため, 必要以上に甲を噛んだりしないことに起因すると推測される. 発見されたクサガメの右後肢以外の欠損部位は完治していたことから, 過去に受けた傷であることがうかがえる. 以上のことから, 本報告で捕獲されたクサガメの四肢欠損はアライグマによる食害の可